

令和 3 年度 政務調査研究報告書

| | | | |
|-------------|--|---------|--|
| 会 派 名 | 会派みらい | 支出伝票No. | |
| 事 業 名 | 先進地視察事業 | | |
| 事業区分 (該当へ〇) | ①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費 | | |

(5)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

南アルプスジオパークが抱える課題を踏まえて、日本ジオパーク委員会が推薦する先進的取組みを実践するジオパークから学ぶ。

(6)実施概要

| 調査・研修の場合の | 日時 | 訪問先・主催者等 |
|-----------|------------------|--|
| 実施日時と | 令和 3 年 11 月 19 日 | ・阿蘇ジオパーク推進協議会 ・阿蘇火山博物館 ・昼食を兼ねての意見交換 |
| 訪問先・主催者 | 10 時～ 14 時 | |

| | |
|------------------|--|
| 視 察 内 容 | <p>1 視察先の概要</p> <p>阿蘇カルデラを中心とした日本のジオパークである。世界最大級の規模を誇る阿蘇カルデラと、現在も噴煙を上げ、平穏時は火口を見学することができる中岳など、日本を代表する活火山をテーマとしている。</p> <p>2. 視察内容</p> <p>出席者：館長 池辺伸一郎氏 (学芸員、理学博士) 常務理事 岡田誠治氏 事務局長 永田紘樹氏 (阿蘇ジオパーク推進協議会)</p> <p>3. 懇談内容</p> <p>A. 意見交換</p> <p>1)阿蘇ジオパークについて</p> <p>阿蘇ジオパークは2009年10月に日本ジオパークに認定され、2014年9月に世界ジオパークに認定されました。また、2015年9月には、世界ジオパークネットワークの活動がユネスコの正式事業となり、阿蘇ユネスコグローバルジオパークとして取り組みを進めている。</p> <p>阿蘇ジオパーク事務局が置かれている施設は、1982年(昭和57年)阿蘇山観光活性化の一環として旧阿蘇町の提案の元で設立され、2008年(平成20年)より阿蘇火山の地形・地質遺産をジオパークとして整備する中で拠点施設と位置づけられている。また、2011年(平成23年)、同博物館内に阿蘇ジオパーク推進室が移転設置されており、施設案内の資料にはこう紹介されている。「生きている阿蘇を体験! Experiencing the alive Aso !」</p> <p>正しく生きている阿蘇山を目の前で体験し、阿蘇の歴史を学ぶことが出来る施設で、火口の状況がリアルタイムで観察でき、阿蘇火山の成り立ちや地形・地質、日本や世界の火山、中岳の火山活動、草原と人々の関わりや動植物などの展示、阿蘇の火山と人々の暮らしなどが紹介されている。</p> <p>視察対応していただいた池辺館長は、大学では地球物理学を専攻し地震を研究していたが、成り行きで同博物館に携わるようになったとのことで、平成12年から館長を務め阿蘇のエコツアーなどの</p> |
|------------------|--|

ガイドもしているとのこと。

2) 視察の視点

2008年から活動を開始し、日本、世界、と認定を受けている。2016年にイエローカードの判定を受けた。その経験と取組に学ぶ。

ジオパーク認定が学術的な視点での認証もあるが、地域資源として生かしていくことが地域振興につながる、この事はよく認識されているが、現在の南アルプスジオパークにあるかという、この度のイエローカードとその後の経緯を見る限りその視点は希薄だったと考えられる。

議会としても、ほとんど認知してこなかったという事で、今回のイエローカードを契機に気づかされた。

そこで、会派では地域資源活かしたまちづくりを政策テーマにしていることから、今回のジオパークを視察先に選定した。

視察先として選んだ阿蘇ジオパークは、世界認定も受けていて先進的な活動をしている団体であり、事務局体制とコンセプトが明快である、との観点で視察先に選定した。

コンセプトは以下のとおり。

○阿蘇の恵みを発信し、地域振興と観光誘致のための広報活動。豊かな大地、美しい水、そうした自然の富を背景とした人々の暮らしの姿そのものが、阿蘇の財産であり誇りである、という考えに立った活動。それが「然」。

○大自然の豊かさ --- 千里を望む草原、肥沃な大地、清冽な水、大自然の「あるがまま」の富を背景に

○地と知の実り --- 阿蘇ならではの風土を十分に生かし、独創的な技をふんだんに発揮した実り

○人々の暮らしの風景 --- ひとりひとりが、ひとりひとりの方法とところざしで、豊かなものを築いていく。

上記のようなコンセプトから「阿蘇百然」として、地域資源を認定し紹介。その地域資源を業種や名前から検索できるようにもなっていて、[*クリエイター・ものづくり*スポーツレジャー*地域貢献*宿泊・店舗*病院・学校などの施設*農林・畜産*食べ物] といった具合に紹介されている。

B. 現地視察 — 「阿蘇火山博物館」の見学

阿蘇ジオパークの事務局が置かれている施設。

世界最大のカルデラを持つ活火山『阿蘇山』の生い立ちから現在の生態系まで、トータルに学習・見学ができるアミューズメントスペース。阿蘇草千里駐車場の一角にあり、約30万年前から現在までの阿蘇の誕生ドラマを動態模型で体感できる。

また、光ファイバーケーブルを通じて、ワイドスクリーンに映し出される火口内の様子は迫力満点。中岳火口壁に設置された2台のカメラが捕らえており、「火山が生きている」のを実感できます。3階のマルチホールでは、阿蘇の自然や噴火口の様子を170度の超広角マルチスクリーンで見ることができ。

永田事務局長の案内、説明を受け、阿蘇ジオパークの背景、活動を、目で見て詳細に知ることができた。

- ・事務局体制は、同博物館を拠点にして専従の事務局員が滞在し、かつ事務局員には構成団体 8 市町村の行政機関からの要員と、池辺さんのような要になる人材、そして学芸員として大学の研究員をスカウトし学術面からサポートする体制をとっている点が特筆できる点。
- ・構成市町村が出資をするが口は出さない。協議会としてあるべき姿を推進していく関係が構築されている。
- ・学芸員で事務局長の永田氏は全国のジオパークとも連携を取っているとのことで、具体的には相互支援を行っているとのこと。永田氏はこの後、糸魚川の支援に赴くとのことで、こういった各地の活動を共有し生かしていく仕組みもジオパークネットワークにはあるとのこと。
- ・自治体寄りにならないように、外部の監事に助言をもらおうと良いとのこと。
- ・官民学協働で活動を進めて行く。現行の活動はすべてジオに繋がるという方向で。
- ・活動主体は地域やガイド。
- ・阿蘇地域内の行政単位で足並みがそろわない。
- ・「大地に根づいた文化」としてのアート。なぜそういうアートになったか。海外ではアートを重要視している。
- ・その土地にあるお祭りの起源は「大地に根づいた文化」として関係する。(地形的制限、災害などから起因する)
- ・「地の利」とは別。(地の質から生まれる食文化・芸術文化・防災ということか?)。地の質とはなにか?
- ・地域の大切なものを残す⇒活かす (大切なもの=地形・地質 ⇒ そこから派生する文化遺産や景観)
- ・博物館は集めるだけだった。⇒今後は違う場にする必要がある。
- ・違う場とは? “ストーリー作り”
感情的・文化的なもの(地元の思い) × 科学的根拠に基づいたジオパーク的メガネ(視点)
この2つのバランスが大事。
- ・地名や氏名の関わりもあるかもしれないという発想が興味深かった。
- ・ユネスコの有識者を外部員として指導を受けることは有用である。
- ・JC (青年会議所) も加入し、産民学の共同での運営をしている。
- ・文化遺産、景観を含めた大地に繋がる「大地に根付いた文化」を大切にしている。
- ・地形的なものなどに根付いたものであれば「祭り」も含まれる。
- ・こうしたことを総合的に調べる取り組みから住民の気づきにつながる。

＜南アルプスジオパークに活かせるもの＞

①大地のあるがままのもの、その恵みを受けた自然や生き物、文化などのすべての事象を大地に関わるものとして捉え、資源化していく取り組みは壮大で分かりやすく、身の回りにあるものすべてが対象になる考え方であることから、私たちの南アルプスジオパークにとっても考え方の転換につながるのではないかと思う。

②南アルプスジオパークも、拠点整備と人材配置、コンセプト、を明確にして活動していくことが求められるのではないかと考えられる。

③南アルプスジオが位置する地域には、文化、祭りは全国に誇れるものがある。飯田市で言えば、遠山郷には、霜月祭りという独特のお祭りがある。それも「大地に根づいた文化」なのだとなれば、その因果関係を紐解いていくのもおもしろそう。

それらは、阿蘇に見たように、大地（ジオ）と結ぶ関係が明らかであることから「あくまでも大地に根付いた南アルプスと文化」を素材として内外に発信する手立てを研究すべきである。

令和3年度 政務調査研究報告書

| | | | |
|-------------|--|---------|--|
| 会派名 | 会派みらい | 支出伝票No. | |
| 事業名 | 先進地視察事業 | | |
| 事業区分 (該当へ○) | ①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費 | | |

(7)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

南アルプスジオパークが抱える課題を踏まえて、日本ジオパーク委員会が推薦する先進的取組みを実践するジオパークから学ぶ。

(8)実施概要

| 調査・研修の場合の | 日時 | 訪問先・主催者等 |
|-----------|------------|-------------------------------------|
| 実施日時と | 令和3年11月20日 | ・島原半島ジオパーク協議会 ・雲仙岳災害記念館 ・ジオツーリズム |
| 訪問先・主催者 | 9時～15時 | |

| | |
|------|--|
| 視察内容 | <p>1 視察先の概要</p> <p>島原半島ジオパークは、日本の西端、九州の長崎県南部に位置し中心には雲仙火山がそびえている。「人と火山の共生」がテーマで、雲仙火山の噴火が引き起こした、たび重なる災害とそこからの復興、火山がつくり出す恵みや様々な地形と人との関わりを学ぶことができる。</p> <p>2008年2月に設立され12月に日本ジオパークに認定。続く2009年8月には世界ジオパークの認定を受け今日に至る。イエローカード判定をもらったことがある。(地域に認識が足りない。事務局体制が悪い)</p> <p>島原半島ジオパークの事務局がおかれている雲仙岳災害記念館は、「がまだすドーム」ともいい、平成2年11月7日雲仙普賢岳の噴火により出現した溶岩ドームが火砕流となって5月26日、6月3日に多くの死傷者、行方不明者を出したが、その土石流が海を埋めてできた新しい陸地に建設されたのが、火山のすべてを体験できる日本で初めての体験型火山ミュージアム「雲仙岳災害記念館」である。</p> <p>「がまだす」とは島原地方の方言で「がんばる」という意味で、1996年の噴火終息宣言まで、この地で何が起き、何が残ったのか、自然の驚異と災害の教訓を風化させることなく正確に後世へ残すために造られた。</p> <p>施設の目の前に雲仙普賢岳が覆いかぶさるようにそびえる姿は圧巻だが、これまで何度となく噴火と火砕流があった歴史を想うと、ここに暮らす人はどんな思いで歴史を繋いできたのかと、雄大な景色が対照的に思われた。</p> <p>2. 視察内容</p> <p>出席者：事務局長 中村隆敏氏 (島原半島ジオパーク協議会) 認定ガイド 長谷川重雄氏 (島原半島ユネスコ世界ジオパーク認定ガイド) (島原半島観光連盟・火山学習・街あるきガイド)</p> <p>3. 懇談内容</p> <p>A. 意見交換</p> <p>事務局長の中村隆敏氏の説明では、島原半島に暮らす人々は繰り返す火山噴火に対峙し、災害を乗り越えてきたとのこと。その一方で雲仙火山からの恵みを生活の中に取り込み、豊富な湧水と多様な温泉、肥沃な土壌が育む農産物、湧水がもたらすミネラルが生み出す豊かな海洋資源は、活火山・雲仙岳があるこそ得られる地域資源として、住民は普賢岳と共に生きてきた。と島原の歴史を語り大地と共に</p> |
|------|--|

に生きてきたこととの紹介があった。

ここではジオパークが身近な暮らし・生活と共に有ることだと知った。

島原半島ジオパークは、その運営費を島原・雲仙・南島原の 3 市で協議して負担していますが、なかなか思いの違いもあるらしく将来的には会費制の採用も検討しているとのことでした。

予算は年度間に差はあるが、3 市からの派遣人件費は除いて 2600 万円程が事業費。事業費の増減は、事業の内容により増減しており印刷物・臨時採用人件費・看板等による。

◎事務局体制

島原市 2 名、雲仙市 1 名、南島原市 1 名、協議会雇用 2 名、非常勤 1 名 — 7 名体制

うち 2 名は、火山地質学、地理学を専門とする職員、1 名は国際交流専門員

2) 視察の視点 — 「ジオパークをいかにして地域振興に生かしていくか」

私たちはジオパークを活用した地域振興を考えてしまいがちだが、その前にまずは自分たちの暮らしとどう関わっているかを考えることも、大切な視点。

中村氏は、ジオパークが目的で来る観光者は少ないと紹介する。ジオパークに係る歴史や文化を学ぶこと、それを伝えること、地域の誇りに繋げること。これらの活動が地域振興につながる、とも説明があった。また、ジオに関心のある観光客には日本人の他外国人も多いことも紹介があった。

また、ジオパーク同士の協力も大切で、現に他のジオパークの支援に島原から派遣しているとの事。そのことによりジオを起点とした振興策につながっていくことにも触れていた。

B. 現地視察 — 「ジオツーリズム」の体験

島原半島ユネスコ世界ジオパーク認定ガイドの長谷川重雄氏の案内により、火山の脅威を知ることのできる「ジオツーリズム」を体験した。また、ガイドとの昼食時の懇談で、さらに内容を深めることができた。

◎「震災記念館展示見学」噴火の大災害をたどる

島原半島ジオパークの事務局が置かれている施設。

1990 年 11 月より約 5 年間にもおよぶ雲仙普賢岳の噴火。この地で何が起き、人々はどのように乗り越えてきたか。自然の驚異と災害の教訓を風化させることなく後世へ残しながら、火山や防災、ジオパークまで、幅広く学ぶことができる通称「がまだすドーム」。

◎「平成噴火」をたどる

1990 年からおよそ 5 年間続いた平成噴火による災害遺構が伝える、地球の鼓動を体感するコース。火山噴火のすさまじさが体感できた。

- ◆千本木展望所
- ◆旧大野木場小学校被災遺構
- ◆上木場火砕流被災遺構
- ◆土石流被災家屋保存公園

・ボランティアガイドの存在

特にボランティアによるガイドに注目したい。案内いただいた長谷川氏は、認定ガイドとして私たちに普賢岳の歴史やまちの様子を丁寧に案内してくれた。平成2年の火砕流による被害はそのまま保存されていて、当時のすさまじさを目の当たりにさせてくれる。一方で田畑や暮らしの様子などにも触れ、火山と共生してきた人々の営みを知ることが出来る。

- ・ジオパークの楽しみ方を提供することが大切。
- ・そこで暮らすことの恵みを受け取る(危険はあるけれども同時に恵みもある)
- ・観光連盟との連携(連泊を伸ばす仕掛けづくり)が必要。
- ・地域、関係者、住民、さまざまな資源を巻き込む力が大切
- ・国にはジオの議連がある。

- ・イエローカードが出たから前に進むのではないか。
- ・日本、世界、と認定を受け、「世界」ではグリーンカードになっている。
- ・ジオの見所をきちんと伝え、保全していく取組みが重要で、ガイドの養成が要である。
- ・子どもたちへの教育のスタッフを充実させることが重要。ジオパークの認定があるからこれを推進できる。ジオの専門性や魅力を知ることから「いい所に住んでいる」との自負が生まれる。地域を自慢できる。
- ・なぜ、噴火のある危険な所に生活するのか。噴火もある自然の中で地域を大切にしながら暮らしていくということを知る。認定ガイドらによって学校で上手に伝えている。
- ・ジオで観光客が増大するとは限らない。事務局としては、ジオにこだわるだけでなく、観光連盟と共同で、ジオの推進と観光振興を行っている。
- ・ジオを目的に来る人は10%。1泊から、連泊での滞在を目指す。
- ・今後の運営では、全国のジオ同士で協力し合う(相互の研修や派遣)ことも可能である。JGNによるサポートもある。

<南アルプスジオに活かせるもの>

度重なる大噴火による災害を被る「危険な所」の土地で暮らし続ける人々。こんなジオと人々の暮らしもジオパークの資源として地域振興に生かせるのではないかと、感じさせられた。

南アルプスジオの地域は、「危険な所」までとは言えないが、限界集落を標榜する厳しい環境であるくらしのなかで、「生まれたところで暮らすことの誇り」を、ジオを教材に子どもたちが学ぶ姿は参考にしたい。

ジオ同士のネットワーク、学術面と文化をうまく結びつけることなどで、JGN との連携相談を進めるとともに、何より南アルプスジオの活動の幅を広げる「認定ガイド」の養成などの推進体制の確立により、地域の住民に気づきを与え、その上で外から人を呼び込む南アルプスジオの未来像が描ける。

＜南アルプスジオパークに活かせるもの＞

- ①大地のあるがままのもの、その恵みを受けた自然や生き物、文化などのすべての事象を大地に関わるものとして捉え、資源化していく取り組みは壮大で分かりやすく、身の回りにあるものすべてが対象になる考え方であることから、私たちの南アルプスジオパークにとっても考え方の転換につながるのではないかと思う。
- ②南アルプスジオパークも、拠点整備と人材配置、コンセプト、を明確にして活動していくことが求められるのではないかと考えられる。
- ③南アルプスジオが位置する地域には、文化、祭りは全国に誇れるものがある。飯田市で言えば、遠山郷には、霜月祭りという独特のお祭りがある。それも「大地に根づいた文化」なのだとすれば、その因果関係を紐解いていくのもおもしろそう。
それらは、阿蘇に見たように、大地（ジオ）と結ぶ関係が明らかであることから「あくまでも大地に根付いた南アルプスと文化」を素材として内外に発信する手立てを研究すべきである。